

日本山岳会「山岳」第五十六年（一九六一）抜刷

チリ中央アンデスの山々

—第二次日本・チリ合同遠征（一九六〇年）—

神戸大学山岳会

一、はじめに

神戸大学山岳会、山岳部に南米アンデスへの志向が芽生えてからすでに久しい。創立当時から海外雄飛をめざし、南米貿易の開拓に多くの先輩を持つ神戸高商——商大の伝統が生きているのである。

この南米への夢は日本・チリ合同のペタゴニヤ探検となつて実現し、未知のペタゴニヤ大陸が踏査され、両国の隊員によりアレナレスが初登頂されたのである。（「山岳・五十三年」参照）この遠征の成功は山岳部の若いメンバーを刺激せずにはおかなかつた。再三にわたる遭難に停滞しがちであった山岳部は、アンデスの夢をよりじりに再びトレーニングを始めたのであつた。

今回の日本・チリ合同チリ中央アンデス遠征（Expedición Chileno-Japonesa a Los Andes Centrales, 1960）の発端は、パタゴニヤの隊員達が遠征を終えサンチャゴに引揚げて来た時に始まる。サンチャゴから近く、気候の良いチリ

中央アンデスに数多くの未登峰を残した地域があるが、日本の山でトレーニングを行こなった山岳部員達を派遣し、リハビリテーションのためチリ大学山岳会の学生達と合同登山を行こなわせてはという計画が、両国の隊員達によつて計画されたのであつた。持てあまし登攀意欲を日本の冬山のバリエーション・ルートに向けがちであつた部員達にとつて、この合同遠征の計画は雄大な海外の山々への夢を抱かせ、合宿をより意欲的なものにした。

一方チリ国山岳界の状況はいかゞであつたろうか。チリ・アンデスにやつて来た数多くの外国隊に刺激され、チリでは他の南米諸国よりずっと早く近代登山が発展し始めていた。全国の山岳団体はチリ山岳連盟 (Federación de Andinismo y Excursionismo de Chile) に包括され、この連盟の下には、その中核組織として、より困難な、より高度な登攀を目的とするチリ山岳アカデミー (Academia Nacional de Alta Montaña) が存在する。この組織はチリ山岳連盟に所属する各種山岳団体の精銳メンバーにより構成され、海外遠征の実現をその使命として意欲的な活動を始めていた。

ペタゴニヤ探検終了後も両国の隊員を中心に通信を続けていたのであるが、山岳部員からなる小パーティをチリ・アンデスに派遣したいという田中薰会長の手紙に対し返事が来たのは、一九五九年九月であった。チリ山岳連盟会長サンロマン、山岳アカデミー会長B・ゴンサレス両氏の名で正式に学生を招待し、山岳アカデミーの行こなうチリ中央アンデスの遠征に日本隊員の参加を希望して來た。

検討した結果、学生のみとはこの計画はあまりにもスケールが大き過ぎるため、イニシャティブは神戸大山岳会に移され、九月末山岳会員二人、部員一人の編成を内定した。

リーダー 太田直之 (経営学部卒 二十九歳)

丹波洋 (経済学部卒 二十六歳)

豊田寿夫 (工学部学生 二二歳)

(127)

チリ中央アンデスの山々

地球の裏にあたるチリ国との通信はどうしても最低二週間かかる。その上相手は南米ののんびりとした国ゆえ、われわれがいくらあせつても交渉ははからだない。従来の遠征隊の例にもれず渡航申請、装備の準備等全く目のまわるような忙しさであった。

装備は出来るだけペタゴニヤの残品、日本の山でふだんから使用しているものを使い、又今回のチリ中央アンデスはペタゴニヤ地方に比べ天候に恵ぐまれた地域であることが予想されるので、装備はつとめて軽量化をはかつた。食糧は合同遠征であるから全面的に現地食に依存し、若干の嗜好品以外は一切持参せず、費用も従来の遠征に比べ極力抑え、あらゆる面で軽量遠征隊のモデル・ケースになるよう努力した。

すべての準備を終え、一九五九年一月二八日神戸港から川崎汽船ゴウシュウ丸で、チリ国バルバライン港まで二カ月の船旅に出発したのであった。

II. チリでの準備

一九六〇年の新春を中米ニカラグワで迎え、チリ国バルバライン港に上陸したのは一月二二日である。チリでは夏も今が盛り、スペイン風の美しい街は南米特有の明るい太陽で一ぱいだ。大使館員、在留邦人、チリ山岳連盟の役員達の援助で、困難視されていた通関は予想以上に簡単に終り、一切の荷物を内陸の首都サンチャゴに運び日本人会に落ちつく。

山岳連盟、アカデミー側の役員達と今後の計画につき早速検討を始める。出発前の約束では公用語は英語のはずであるが、ラテン系の国民の常として自分達の言語に対する誇りが強く、ほとんど英語をやつていなため交渉はいきおいスペイン語になつてしまふ。しかし登山という共通の目的を持つ山男達だ。西、英、独の各國語に身ぶり手ぶりをまじえ何とか話しあつた。

最大の関心事であった遠征の目的地は、日本からはるばるやつて来たわれわれに、チリ中央アンデスについてなるべく広い知識を得させたいという連盟のあたゝかい意図から、次の三つの地域に決った。

I イエソ谷源流の山々

サンチャゴの東方、チリ中央アンデスのほど中心部に位置し、チリ中央アンデスの特徴を最も多くそなえた地域である。夏には新雪はほとんどなく氷河は安定している。ペニテンテ氷柱(極度に乾燥したこの地方独特の氷河現象で、氷河が溶ける時五〇~一五〇センチメートルの氷柱となる)以外登山のさまたげになるものはまざない。首都に近いため早くから開け、地図も比較的完備している。未登峰は無名峰(五〇〇メートル)、ブンタ・オフ(五〇三〇メートル)の二峰のみである。

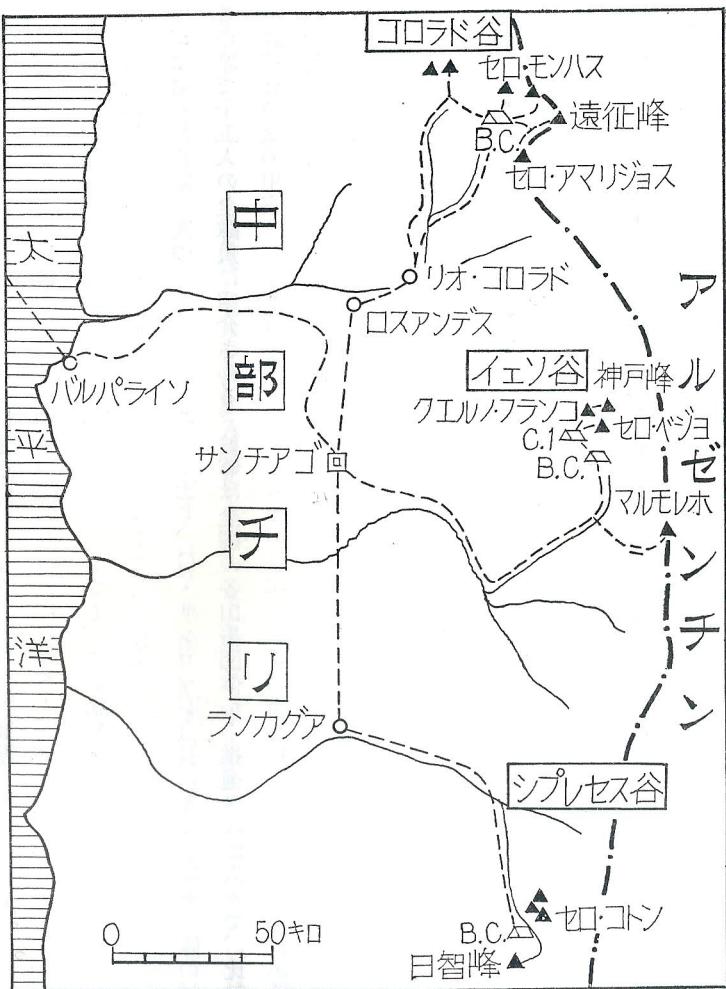
II シプレセス源流の山々

サンチャゴの南約一五〇キロメートル、チリ中央アンデスのほど南端に位置し、気候、景観共にパタゴニヤ地方に似た氷河地帯である。一九五九年ガルシャ(チリ大学講師、パタゴニヤ隊員)の指揮するチリ大学山岳部の隊が踏査したのみで、広大なシプレセス氷河を中心に四〇〇〇~五〇〇〇メートルの数多くの未登峰が存在する。

III ロロラド川源流の山々

チリ中央アンデスのほど北端に位置するアルゼンチンとの国境地帯で、チリ北部の砂漠地帯の景観を示す。この地方は古くからアルゼンチンとの交易の通路として開け、現在は国境の要塞地帯のため山岳部隊によりかなり踏査されている。極度に乾燥した砂漠が近いためか氷河の発達は悪いが、五〇〇〇メートル級の処女峰が多く残っている。

遠征への出発を前に、ロバルデスのドイツ人遠足クラブのヒュッテ (Hütte Lo Valdés, Deutsche Ausflugverein) 附近の氷河でトレーニングが行こなわれ、われわれ三人とチリ側からK・クラウゼン以下三人が参加した。彼等はす



チリ中央アンデス概念図

ばらしく愉快な仲間だ。パタゴニア隊に参加して合同遠征の経験のあるクラウセンは何かとわれわれを助けてくれる。日本出発前われわれが一番心配したのは合同遠征隊のパーテイシップの問題であった。過去の国際合同遠征隊の幾多の事故は、この問題がいかに難しいか良く物語つている。いわんやチリ人は、われわれとは全然かけはなれたラテン系の文化の伝統を持ち、スペイン語を話す国民である。しかし、この短いトレーニングの山行を通して、われわれは彼等ならば安心してザイルを組めるという信頼感を得ることが出来た。

サンチャゴに帰ると食糧、装備の準備はほぼ終つており、G・サンロマン会長の家で合同登山隊の結成式が行こなわれた。この席で十五人の全隊員に紹介される。彼等は全国の各山岳団体から推選された人々で、比較的若い隊員が多く将来それぞれの会の中堅として活躍する人々のようだ。スペイン系の血をひく国民であるせい性格はきわめて明るく、初対面であるにもかゝわらずすっかり仲良くなる。チリ名産のブドウ酒とシャンペインに酔いながら、来たるべき登山への期待に胸をおどらせたのであった。

III 第一の山行 イエソ谷へ

日本側隊員 大田直之、丹波洋・豊田寿夫
チリ側隊員 K・クラウセン Kurt Claussen (11歳、チリ側リーダー)
F・シュレーゲル Fritz Schlegel (11歳、食糧担当)
J・キンテーロ Jorge Quintero (11歳、装備担当)
C・バースケ Cesar Vasquez (11歳)
M・アクニヤ Maximiliano Acuña (11歳)

チリ中央アンデスの山々

一九六〇年二月二日、山岳アカデミー会長B・ゴンサレス氏の運転する大型トラックに迎えられ日本人会を出発、ドイツ人学生寮に向う。こゝでクラウセン、シュレーゲル、アクニヤ隊員と彼等によつて準備された食糧を積込む。途中キンテーロ、バスク隊員と装備を積み、マイポ川にそつて一路イエソ谷に向う。

首都サンチャゴを一步郊外に出るとあたりは一面の牧場地帯、朝もやの中で牛馬がのどかに草を食べている。われわれが山の歌を口ずさめればチリ人達はスペイン語でそのメロディを追つてくる。時々それ違うチリ美人にヤホーをかける。山岳部の連中と日本の山に向う時のような気安さをおぼえる。森林限界を過ぎると、あたりはアンデス特有の荒涼たる景観にかわり、両側から茶褐色の岩壁がおゝいかぶさつてくる。

カレダ・ロダーダ鉱山でアントニオ親爺以下三人の馬方とラバ一九頭に迎えられ、国境ピウケーネス峠への分歧点で野宿する。このあたりは極度の乾燥気候のため、夜は馬糞をもやして暖をとりテントは使わずオカンする。空気が澄んでいるせいか星座が美しい。チリの仲間が南十字星を教えてくれる。われわれはすでにアンデスの真唯中に来ているのだ。

明けて二月三日、朝からすばらしい晴天だ。紺碧の空にアルゼンチンとの国境稜線がくつきりと浮び上つてゐる。早朝からアントニオは部下を指揮してラバの手入れに忙しい。もともと、ボーター、シエルバのいないチリ・アンデスの登山は馬方(arriero)とラバ(mula)なしでは考えられない。山の地理に詳しい馬方がこのラバ——アンデスのラクダ——でいかに高くまで登山者の荷物を運んでくれるかにより、その山行の成否が決るといつてもさしつかえない。幸いアントニオは若い頃から国境を越えてアルゼンチンとの交易に従事した経験深い馬方で、われわれのため身的に働いてくれた。

八人の隊員と荷物を積んだ一九頭のラバのキャラバンは、馬方達に引率されてイエソ谷(Valle de Yeso)を進む。放牧地帯が終るとあたりは全くの無生物地帯で、荒涼たる河原をラバはモレーンに苦しみあえぎながら登つて行く。

五時間のキャラバンを終えイエソ谷ベジヨ氷河末端、高度三六〇〇メートルのモレーンの中のベース・キャンプ予定地に到着した時、午後から曇りがちであった天候はみぞれに変わっていた。

チリ隊員の話では、この時季に新雪を見ることはまれで今年の天候は異状だとのこと。しかし高山病に経験のない日本側隊員のためにも、出来るだけ早い時期に高所キャンプを出し高度順化を行こなわねばならない。翌日から早く第一キャンプの建設にとりかかる。ベース・キャンプからイエソ川 (Río Yeo) にそいで五〇〇メートル進むとベジヨ氷河 (Glacier Bello) が現れる。われわれは中央モレーンづたいに約四時間登り、第一のセラツクスをまき四〇〇メートルのモレーンの中に第一キャンプを建設した。こゝからは無名峰 (五一〇〇メートル) は見えないが、クエルノ・ブランコ (Cuerno Blanco 五〇〇メートル) の南の氷壁が美しい。第一キャンプまでの氷河は新雪が少ないとベクレバスにも危険はなく、ペニテント氷柱もまだ現れていない。

二月五日、セロ・ベジヨ (Cerro Bello 五〇〇メートル、一九五一年初登) の第二登と高度順化のため、北側のガリーからベジヨの頂上へ続く稜線を登っていた時、シュレーベルが落石を受け新雪のルンゼを二〇〇メートル滑落して頭と足に歩行不能の重傷を負ってしまった。われわれは一切の登山活動を中止し、四五〇〇メートルの地点に仮キャンプを設けて彼を収容した。サンチャゴから救援隊を待ちベース・キャンプに下すのに六日間の日時を費やしてしまった。クレバスで危険な氷河の中で、雜木林のように密生した一五〇センチメートルもあるペニテント氷柱を切り倒して道を作り、担架を下すことは想像以上に困難な作業であった。サンチャゴからかけつけてくれた連盟の人々の努力と、馬方アントニオの献身的な協力で二月一〇日シュレーベルは無事病院に運ばれた。

二月一日、久しぶりで充分睡眠をむさぼった残る七人の隊員達は河原の砂にねそべり、日本食、チリ食共それぞれ自慢の料理を作り元気を回復する。

一方、今後の計画についての話し合いは全く難行している。というのはシュレーベルの事故が遭難に経験のないチリ

(133)

チリ中央アンデスの山々

隊員に与えた精神的影響は非常に大きく、又救出作業で体力も消耗し、すっかり消極的になってしまったのだ。シュレーベルを看病して仮キャンプに滞在中、目的の無名峰をゆっくり観察したチリ側リード、クラウゼンまで、この山全体が非常にもらいうえに、唯一のルートと思われる西南壁を登るルートが見つからないとの理由で、無名峰を放棄することを申し入れてきた。はるばる遠い日本からやって来たわれわれは、そう簡単にあきらめるわけにはいかない。しかし馬方との約束で二月一七日にはラバが迎えに来ることになつてゐるから、登る期間はわずか四日間に限定されるわけだ。無理な行動のため再び事故を起すようなどがあつてはならないと、チリ側に妥協して計画は次のように決定された。

(i) プンタ・オフ (Punta Hoff 五〇三五メートル、未登)

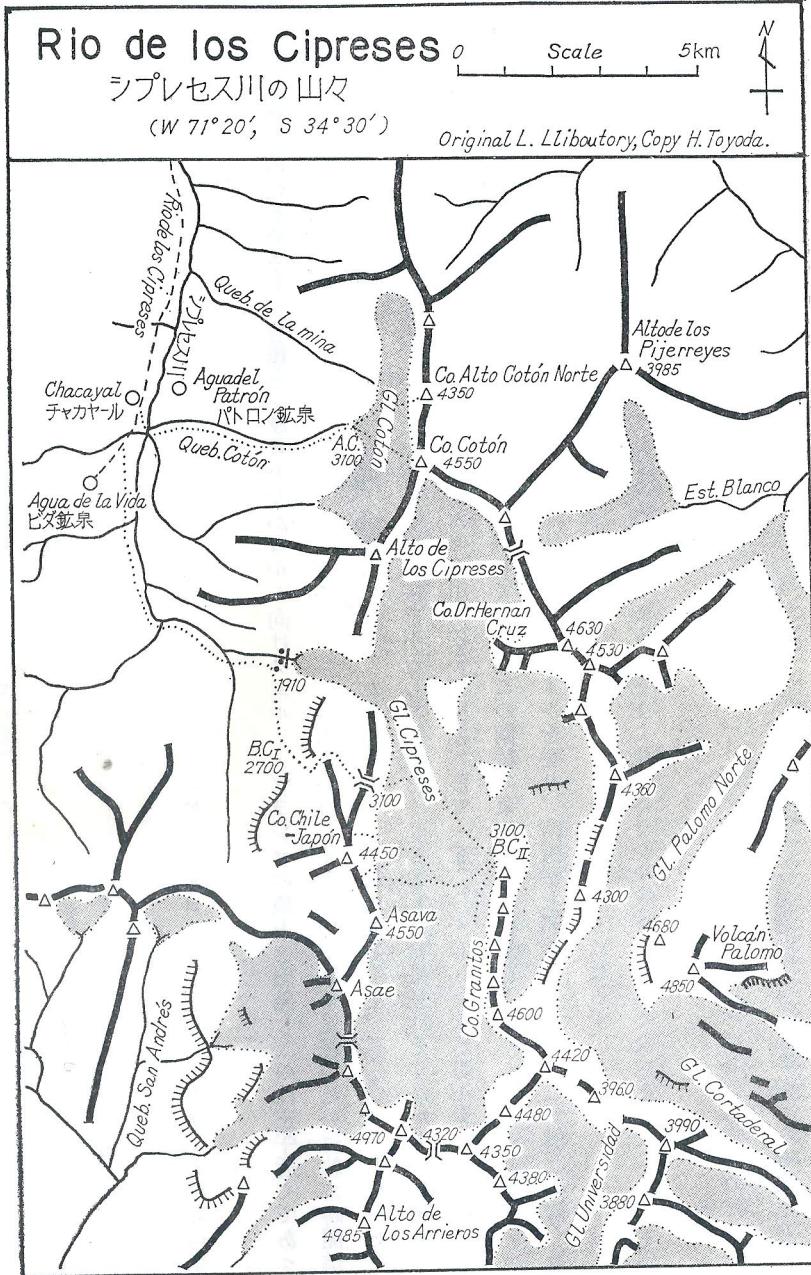
丹波、キンテーロ、バスケ

(ii) クエルノ・ブランコ (Cuerno Blanco 五〇三〇メートル、一九五一年初登頂) 及びイエガス・ムエルタス (Yeguas Muertas 四九一〇メートル、一九五一年初登頂)

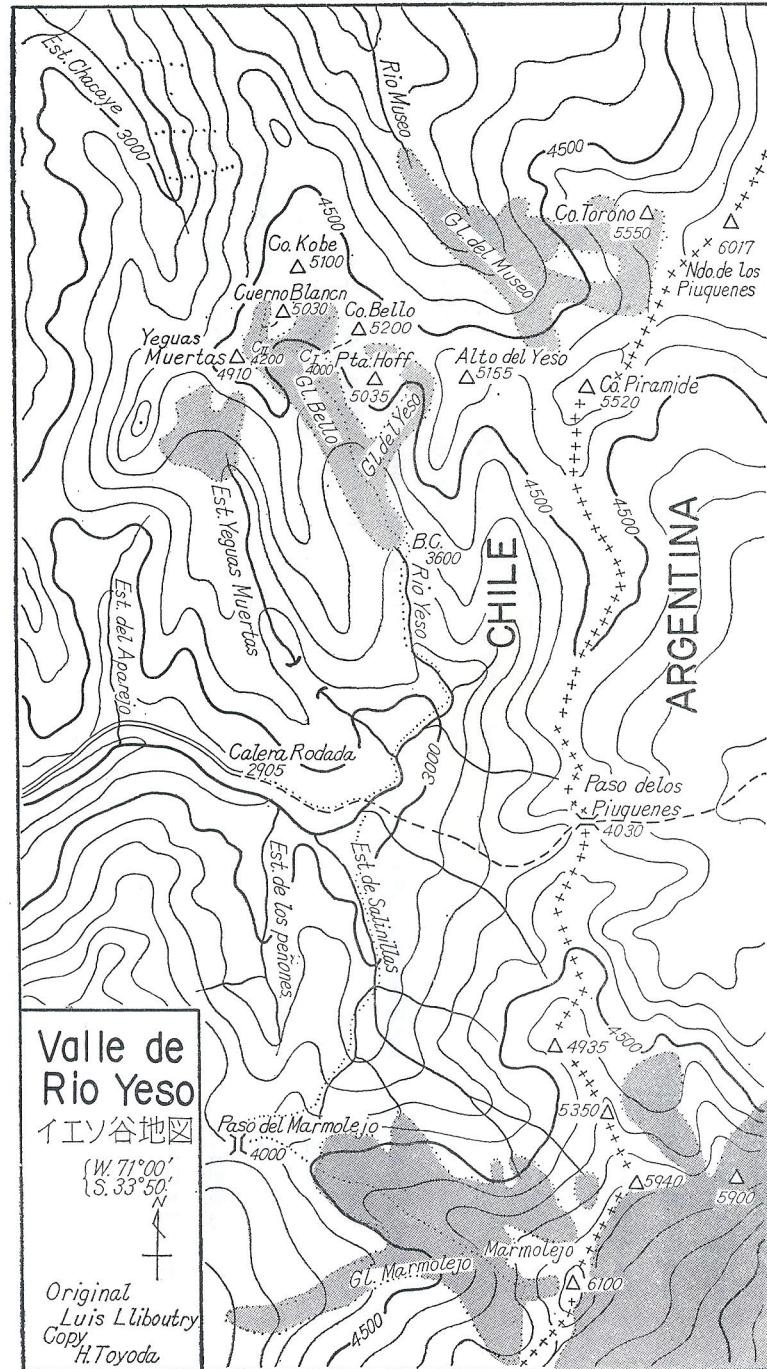
太田、豊田、クラウゼン、アクーニヤ

太田ペーティ四人は第一キャンプからベジヨ氷河を横断してイエガス・ムエルタス氷河 (Glacier Yeguas Muertas) に入り、クエルノ・ブランコの頂上から南西にのびる稜線上の四二〇〇メートルの地点に第二キャンプを設置する。翌一三日はすばらしい晴天だ。第二キャンプを出発した太田ペーティはイエガス・ムエルタス氷河をクエルノ・ブランコ頂上をめざして進む。クレバスと一五〇センチメートルもあるペニテント氷柱にさえぎられて、なかなか高度があがらない。途中から尾根伝いに登る。アンデス特有のもりい瘦尾根はそれにもまして消耗する。約五時間でクエルノ・ブランコ (五〇三〇メートル) の頂上に到着して第二登に成功する。

(134)



(136)



Cuerno Blanco とはスペイン語で「白い角」の意味で、その名にふさわしく美しい山だ。北の方にはアコンカグアが遠くかすみ、ベジョ氷河の源となつてゐる四六〇〇メートルのコルをへだて、眼前には念願の無名峰があるでわれわれを威圧するように鎮座してゐる。明るい太陽にその岩肌が無氣味に輝き、全く手のつけられない悪い山だ。

何を思つたのか、先日あれほど慎重論をとなえていたリーダー、クラウセンが、この無名峰を登ることを提案する。天候は非常に安定しており、身体の調子はすこぶる良い。夕方までに登攀を終えコルに引返しビバークするは可能であろう。

無名峰の取付をめざし、豊田とクラウセンがコルへ向けクエルノ・ブランコの頂上を出発したのは正午近くであつた。南にのびる山稜がこの山への唯一のルートである。コルからこのひらくもろい南稜を尾根へたいに約二時間進むと、この稜は深いザッテルとなつて本峰と分離している。たとえそこまで下れたとしても、三〇〇メートルもあるもうい西南壁を登ることはまず不可能である。南稜を引返して偵察をやりなおした結果登れそうなルートを発見する。すなわちこの山の東南、西南の各側面はムセオ川 (Rio Museo) まで一五〇〇メートルほど切れ落ちた絶壁で、東南、西南壁間に稜がザッテルをへて南稜に接続している。この南稜の東側斜面の上部をトラバースするとザッテルに出るが、そこから東南壁の二〇〇メートルの氷のクーロアールを登り、南西壁上部をトラバースして頂上に続く最後の三角形の氷壁を登る」とが出来そうだ。岩がもろくてハーケンはほとんどいたよりにならば、クーロアールの岩と氷の登攀にはずい分難渋する。最後の氷の壁では急な斜面に密生したペニテンテ氷柱が階段の役立をしてくれ、予想以上に簡単だった。

三月一三日午後五時、無名峰 (五一〇〇メートル) の頂上を踏む。「トヨダ、君は遠い日本からはるばる来たのだ。先に登れ」といつてクラウセンはトップをゆずつてくれた。神戸大学の名をとり Cerro Kobe (神戸峰) と命名し合同遠征の記念とする。登頂の感激より下りのルートの心配が先にたつ。ガスがでてもいまわりの山々は見えない。クーロアールを下り終えザッテルで日没となり、一〇時、コル (四六〇〇メートル) に帰りついでピマークする。

一方、第一キャンプの丹波ペーティ三人は、一三日アントンタ・オフ (五〇三五メートル) に向つたが落石が多くて近づけず、引返して、翌一四日セロ・ベジョ (Cerro Bello 五〇〇メートル) の第二登に成功した。これでわれわれは予定の登山計画を終了した。

二月一七日、馬方アントニオがラベ一五頭をつれて迎えにくる。ベース・キャンプを撤収してマルモレホー (六一〇メートル) に向う。

サリニイリヤス谷 (Estero Salinillas) をマルモレホー峠 (Paso de Marmolejo 五〇〇〇メートル) のベース・キャンプまでラバで登り、五五〇〇メートルに高所キャンプを設けて二月二〇日マルモレホー (六一〇〇メートル) に登頂した。チリ・アルゼンチン国境稜線上にあるこの山は、古くから両国の登山家によつて登られてゐる。

二月二二日、山岳連盟の人々に出迎えられてサンチャゴに帰着し、第一回目の山行を終えた。

四、第三回 ハベレス谷へ

日本側隊員 太田直之、丹波洋、豊田寿夫

チリ側隊員 A・モンサレス Arnaldo González (11歳、チリ側リーダー)

E・ゴドイ Eduardo Godoy (41歳、食糧担当)

W・フォルスター Wolfgang Förster (31歳、装備担当)

F・ローバス Fernando Rojas (11歳)

F・ロサレス Fernando Rosales (11歳)

二月二七日、山仲間の運転する小型トラックでサンチャゴを出発してパン・アメリカン道路を南下、ランカグワ市に向う。こゝからシプレセス川(Rio de los Cipreses)にそい最後の部落マイテエネスに到着したのは真夜中だった。

シプレセス谷はシプレー、ユーカリ、ポプラの樹木が豊かに繁る森林地帯で、キャラバン(馬方二人、ラバ十八頭)を進めて行くと河原には巨大なサボテンも見られ、野生の桃やイチゴがおいしい。パトロン鉱泉に近いシプレーの樹影で野宿し、羊の丸焼(asado de obeja)とブドウ酒(vino)でキャラバンの疲れを癒す。

ビダ鉱泉で馬の踏跡は消え、その先は馬方さえ道を知らず、石のゴロゴロした河原にラバがひどく苦しむ。一九一〇メートルの地点に二回目の野宿をする。シプレセス川はこゝで終り、シプレセス氷河まで数百メートルは数段の大滝となって続いており、われわれは南の斜面にラバを進める。二七〇〇メートルのベース・キャンプ予定地まで八〇〇メートルの急な登りはラバがおびえて進まず、二人の馬方は引返すといつて何回もいねる。コロラド草地(Vega de Colorado 11700メートル)は小川の流れるすばらしいベース・キャンプだ。馬方とラバを返し登山準備にとりかかる。

チリ側リーダー、ゴンサレスを中心に早速計画の検討を行こなった。この地域に入ったのは一九五九年のチリ大学山岳部のパーテイのみで、地図はL・リブトゥリー教授の概念図があるきり、概念すらまだ良く知られていない。シプレセス氷河に第二ベース・キャンプを出し偵察を行こなうと同時に、精力的にトランスポートを進めアサバ、無名峰(四四五〇メートル)に高所キャンプのための食糧、装備の確保を行こなわねばならない。

三月二日、金貞で荷上げを開始する。ベース・キャンプから無名峰の北稜に登り、三一〇〇メートルのコルからシプレセス氷河に下る。こゝでシプレセス氷河地帯の全景が展ける。シプレセスの頭(Altó de los Cipreses 約四〇〇〇メートル)、エルナン・クルス博士峰(Cerro Doctor Hernan Cruz 四六三〇メートル、チリ大学山岳部が登頂し部長故H・クルス博士の記念に命名した)の花崗岩の岩壁が美しく輝き、圧倒的な山水河がシプレセス氷河に落込んでいる。氷河は南に広がり、

(139)

(140)

(140)

その末端は見ることが出来ない。

シプレセス氷河は新雪が少ないためクレバスは明確に現れており、ほとんど危険はない。氷河の中央を流れるモレーノづたいに進み、グラニット(四六〇〇メートル)の取付点(三一〇〇メートル)に第二ベース・キャンプを設営した。

三月四日、パーテイを二つに分ける。太田、丹波、ゴンサレス、ロサーレスの四人はアサバ、無名峰間のコルにビバークして三月五日アサバ(Asava 四四五〇メートル)登頂に向う。岩の極度にもろいアサバの北稜を尾根通しに進み、三時間の登攀の後、主峰から六つめのピークに到達した。次のピークへは想像以上に深いギャップがあり、再び急峻な登りが延々と続いている。登攀不能を知り第二ベース・キャンプへ引返した。

一方、豊田、フェルスター、ゴドイ、ローハスの三人は無名峰の南稜のザッテルでビバークするつもりで南側の氷河を登ったが、この稜より頂上へのルートは非常に急峻な上に岩がもろく、登頂の可能性のないことを知り第二ベース・キャンプへ引返した。翌日シプレセス氷河をへだてて無名峰の対岸にそびえるH・クルス博士峰中腹の氷河棚に登り、望遠鏡で偵察した結果、無名峰の北の氷河に登頂可能なルートを発見する。第二ベース・キャンプから見た時は、北の氷河全体が大きなセラックスのようで通過は不可能に見えたが、こゝからよく偵察するとセラックスに通過出来るルートがありそうだ。

三月六日、豊田、フェルスター、ロサーレスの三人は無名峰の北の氷河に取付く。不安定な氷塔とクレバスの連続で、新雪が少ないことがせめてもの幸いだ。それにフェルスターはドイツ生れ、アンデスに一五の初登攀の記録を持つベテランで、すばらしいアイステクニックの持主だ。彼のリードで四時間かゝってこゝを無事通過した。頂上に続く北稜は思ったより長く、ガラガラの尾根に神経をすり減らす登攀が三時間も続いた。

三時三〇分、無名峰(四四五〇メートル)の初登頂に成功する。日本・チリの合同遠征を記念してゼロ・チレーハポン(Cerro Chile-Japón 日韓峰)と命名する。

三月八日、コトンの山々に計画を移すべく若干の食糧と個人装備やペトロ・鉱泉近くのチャカヤール (Chacayal) あや徒步で下る。今後の計画はいへをベースにコトン沢の上部の山々を登る。すなわち

(i) シプレセスの頭 (Alto de los Cipreses 約四〇〇メートル) 太田、丹波、ガドイ、ロサーンズ

(ii) セロ・コーン (Cerro Cotón 四五五〇メートル) 豊田、サンサレス、フュステル

しかし、いの計画はサンサレスの経験不足と統率力不足から無理があり、不明確な問題を残した。食糧も前半の無計画な使用がたりほとんど残っていない状態だった。翌一〇日は焼けつくような太陽に照らされ、コトン沢 (Queradera Cotón) を登り、氷河末端三一〇〇メートルの地点にビバークする。コトンの頭へのルートはいぜんとして判明しない。

三月一一日、豊田ペーティ三人はコトンへ向う。ビバーク地点からコーンまでは一五〇センチメートルもあれば、テント氷柱の野原で、食糧不足のため少量のビスケットと紅茶しか食べておらず、からつく身体でいの氷針の林を進むのは全く地獄の責であった。北面から頂上に続くガリーレーをつたい十二時、セロ・コーン (Cerro Cotón 四五五〇メートル) の初登頂に成功する。

一方、シプレセスの頭を放棄し、調子の悪いガドイを残してセロ・コーンの北側の無名峰に向った太田ペーティも成功して、セロ・アルト・コーン・ノルテ (Cerro Alto Cotón Norte 四三五〇メートル) と命名し、コトン沢の途中で再度のビバークをし三月一二日ベースへ帰つて来た。

シプレセス谷のすべての計画を終え、サンチャゴに帰着したのは三月一四日であった。

五、第三の行程 パロハーネの山々

日本側隊員 太田直之、丹波洋、豊田寿夫

(141)

9

チリ中央アンデスの山々

チリ側隊員 G・H・ミルス Herman G. Mills (二十九歳、チリ側リーダー)

G・ムガ Gaston Muga (三〇歳、食糧担当)

M・ピエグ Mario Puig (三〇歳、装備担当)

H・ドウラン Hector Duran (二十七歳)

P・ドウラン Pedro Durand (二四歳)

J・ボカス中尉 Teniente José Bocáz (二十七歳、陸軍山岳部隊)

A・ガンボーア伍長 Cabo Angel Gamboa (三一歳、")

(142)

三月一九日、山岳連盟会長G・サンロマン氏の自動車でサンチャゴを出発してロス・アンデス市に向う。車の窓から見える牧場は黄いろくなり秋の気配を感じさせる。ロス・アンデス市はチリ・アルゼンチン間国際鉄道の要所だ。こゝでバルパライソ市から貸切りバスでやつて来た、ミルス以下五人の隊員と合流してリオ・コロラド村に向う。今回のキャラバンは国境に近いこの村から始まる。馬方マニエルの家で陸軍山岳学校から特別参加のJ・ボカス中尉、A・ガンボーア伍長に紹介された。

翌二〇日から四日間のキャラバンが始まる。隊員一〇人、馬方二人と荷物を積んだ二四頭のラバはコロラド川 (Rio Colorado) にそつて進む。キャラバン第二日目より森林限界を過ぎ、道は渓谷の中に入り五〇〇メートルもある断崖の途中を進んで行く。「悪魔の通過」 (Paso de Diablo) を通つた時は、ラバもおびえて進すもうとしない大変な難路で、積んでいた多数の荷物を破損した。

秋はすでにアンデスに訪れたのであらうか、夜になるとひんぐく冷え込む。テントを張り馬糞をもやして暖をとる。

三月二三日、四日間のラバの旅を終え、国境レイバ峠 (Paso de Leiba) に近い草地にベース・キャンプを設営した。

附近は乾燥地帯のため氷河の発達は悪く、茶褐色の岩山がちらなり砂漠に近いことを示している。

早速日本・チリ全隊員が集り登山計画を協議した。ボカス中尉の持つてゐる「陸軍機密地図」を中心に検討した結果、計画は次のように決定された。

(i) 国境稜線の二つの無名峰(五一二六、五一三六メートル) 太田、豊田、H・ドウラン、P・ドウラン

(ii) セロ・アルタール (Cerro Altar 四五一八メートル) 丹波、ミルス、ムガ、パイツグ

われわれが乗船を予定した船のスケジュールが早くなつたため計画は大巾に短縮され、偵察なしの一発必中の計画になつてしまつた。毎朝高所は新雪が見られ天候は決して良いとは言えない。この山行では馬方とラバを帰さず、ベース・キャンプに滞在させラバの力を最大限に利用する。

三月二四日、太田パーティ六人は国境の二つの無名峰を登るため、その中間にあるインディオ乗越 (Paso de Rio Indios 高度約四〇〇〇メートル) に向け、馬方マニエルとラバ一頭で出発した。いの谷に入るのは、おそらくわれわれが最初であろう、ガラガラのひどい谷だつた。五〇〇メートルの斜面を登りきると国境稜線の乗越だ。アコンカグアが突然眼前に現れる。

三月二五日、太田、ボカス中尉、H・ドウランは乗越の高所キャンプから西の無名峰(五一三六メートル)に登りセロ・アマリーヨ (Cerro Amarillo 黄色い山)と命名した。

一方、乗越から東の無名峰(五一二六メートル)に取付いた豊田、ガンボーア伍長、P・ドウランの二人はもろい急峻なルンゼで岩登りを強要され、午後三時初登頂に成功してセロ・エクスピデイション (Cerro Expedicion 遠征峰)と命名した。頂上から見るアコンカグアは圧倒的に大きい。アルゼンチン領のため近づけないのが残念だ。

同じ日セロ・アルタール (Cerro Altar 四五一八メートル) では丹波パーティの四人が東尾根から初登頂に成功した。続いて二五日にはレイバ (Nevado Leiva 四六六九メートル) の第二登を行こなう。

三月二七日、ラバで高所キャンプに向い、翌二八日、太田、丹波、P・ドウランにより北峰が、ミルス、ムガ、H・ドウランにより南峰がそれぞれ初登頂された。

三月二九日、コロラド谷でのすべての計画を終え、ベース・キャンプを撤収して四日間のキャラバンを開始した。往路にもまして危険な苦しいラバの旅だ。荷物用のラバが滑落して足を挫いてしまつた。長い山旅にラバは疲れているのであらう。三回計六〇日の計画に耐えたわれわれ日本人も疲れ切つており、ラバの上で居眠りをやつている。

アンデス遠征のフィナーレ——それはチリ陸軍山岳学校に終る。前回パタゴニヤ遠征には、いの学校で教官を勤めるピデリット大尉が派遣され、観測器具一式を寄贈したこともあり、今回のボカス中尉、ガンボーア伍長の母校である。国境に近いリオ・ブランコにはスイス、フランスのアルプス兵学校に範をとつたヒュッテ風の立派な石造の学校があり、夏は附近の岩壁で岩登り、冬はアンデスの雪中行軍に士官八〇、兵二五〇名が国境守備兵として訓練されている。

長い国境をペルー、ボリビヤ、アルゼンチンに接して国境紛争の断え間のないチリが、国境守備に真剣なのは当然のこと、われわれの隊に参加したボカス中尉とガンボーア伍長は、外国登山隊の装備と技術を学ぶために特別に派遣されたのだ。

四月四日、コロラド谷の帰路、陸軍からの正式の招待を受けたこの学校を訪れたわれわれは大歓迎を受けた。早速酒保を開いて軍隊式の大酒宴が始まり、司厨兵の給仕でアンデスの山料理が運ばれ、高価なシャンペインがどんどん抜かれる。チリの軍人は底抜けに愉快だ。われわれも大いにのむ。

学校を取りまく岩壁が夕焼けで真紅に染る頃、さしもの酒宴もやつと終りに近づいた。醉眼に映えるアンデスの白

い雪の峰々、忘れ得ぬなつかしい思い出だ。

六、おわりに

日本・チリの合同という特異な形式で組織されたこの遠征では、われわれ日本人は好むと好まざるとに拘わらずチリ人の生活に溶けこまねばならなかつた。六〇日間の共同生活中では、生活様式の相違から来る誤解も決して少なくなかつたが、時間をかけて話合えばなつとくのいく種類のものだつた。

東洋系のアラブ人と西欧系のゲルマン人等、多くの人種の混血によつて生れたスペイン系のチリ人には、英米で見られる人種偏見、特に東洋人に対するそれは全然見られず、われわれは何のこだわりもなく話し合うことができた。パーティ・リーダーは前もつて決つっていたわけではないが、ケイス・バイ・ケイスで各自の実力によりおのずからオーダーが生れて來た。

中央チリ・アンデスの未知の地域を踏査し数々の処女峰に登り得たのであるが、それはともかくとして今後日本とチリの親善に、われわれの小さな山行が少しでも役立つことを祈るのである。(豊田寿夫記)

(附記) イエソ、シプレセスの地図は、チリ大学リブトウリー教授の概念図にもとづき修正を加えて作製した。この地域は正確な測量がまだ行われておらず、標高は各資料によつてまちまちだが、登頂時の高度計の読みみを考慮して一部補正しておいた。

コロラド谷は国境要塞地帯のため、適当なオリジナルが入手できず作製できなかつた。本文中の高度はボカス中尉携行の「陸軍機密地図」(十万分の一)を記憶していたので、かなり正確のものと思う。(豊田)



セロ・チレ・ハポンの北稜のコルから見たシプレセスの頭

Alto de los Cipreses (C 4,000m) as seen from a col (3,100m) on the north ridge of Cerro Chile-Japon (4,450m).



南から見たシブレセス氷河の本流

The main stream of the Cipreses Glacier as seen from due south.



クエルノ・ブランコの南面（第2キャンプから）

The southern face of Cuerno Blanco (5,030m) seen from Camp II.



セロ・ベジヨの頂から見たセロ・コウベの東南面

The South-eastern face of Cerro Kobe (5,100m)
seen from the Summit of Cerro Bello (5,200m),



チリ中央アンデス・シプレセス遠征の日智隊員

The members of the Cipreses Exp. of the Chilean Central Andes.(Back row) E. Godoy, N. Ota (Jap. leader), H. Toyoda, A. González (ch. leader).
(front row) F. Rojas, F. Rosales, H. Tanba, W. Förster.

Yeso 谷 1960.2.2-2.20



Y-1 キャラバンの出発点 C.ローラーダ鉱山
(サンチアゴからの陸路到着点)



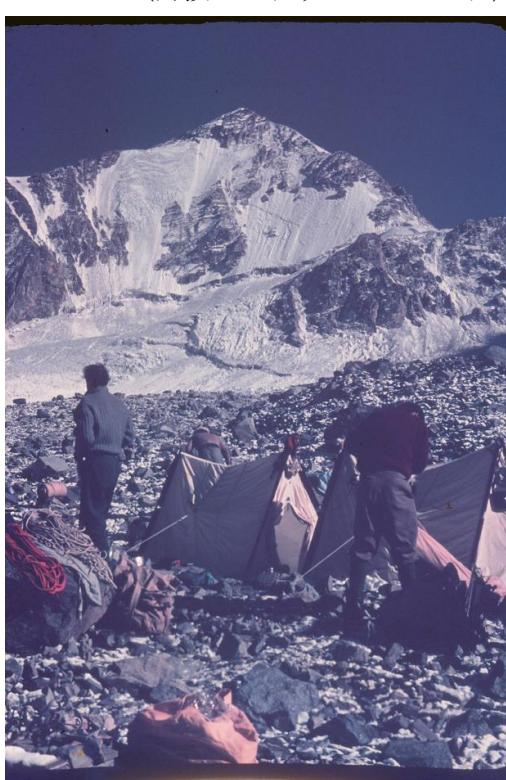
Y-2 同上途中の水場 (vega) でラバに給水



Y-3 イエソ谷モレーンをボッカ
(丹波・クラウセン・バスケ)



Y-4 イエソ谷 BC 谷奥の C. Blanco が見える



Y-5 C1 から Cuerno Blanco (5030m) を望む



Y-6 C. Blanco 南面の氷河を上る



Y-7 C. Blanco 中腹より見た Co. Bello(5200m)



Y-8 チリ中央アンデスでは氷河は乾燥のため
ペニテンテ化している



Y-9 同上氷河のペニテンテ氷柱は 1.2~1.5m まで
成長している



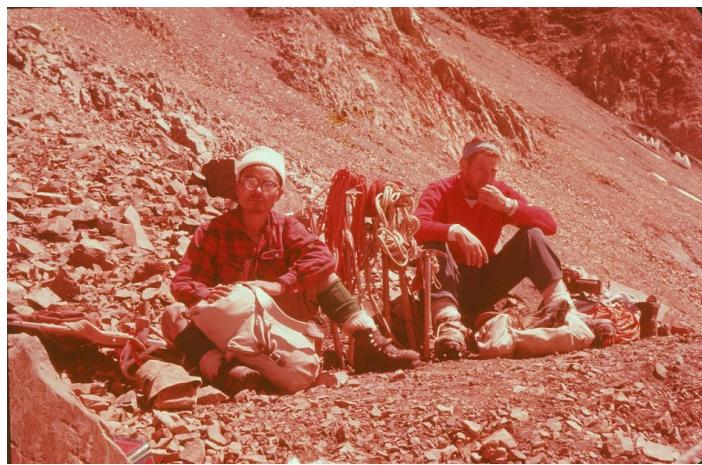
Y-10 同上氷河のテーブルストーン



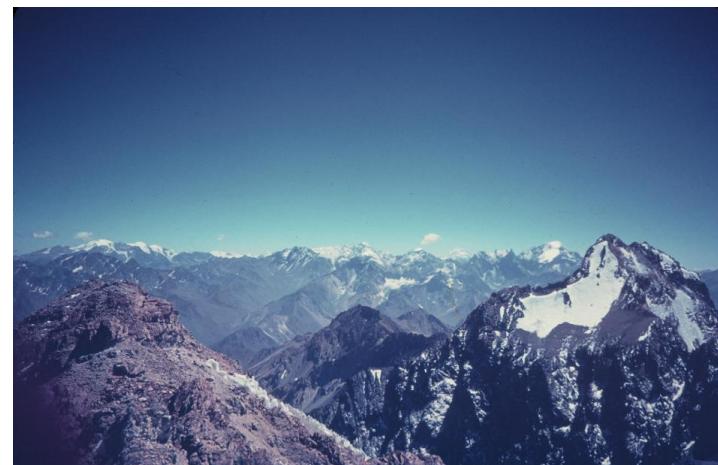
Y-11 C. Blanco 南面氷河を上る



Y-12 チリ中央アンデスの山々 (東北方面を見る)



Y-13 クラウセンと共に



Y-14 C. Blanco 頂上から見た無名峰 (5100m)



Y-15 同上無名峰東南陵の氷結クロワールを登る
パートナー・クラウセン



Y-16 同峰をセロ・コーベ (5100m) と命名
(1960.2.13)



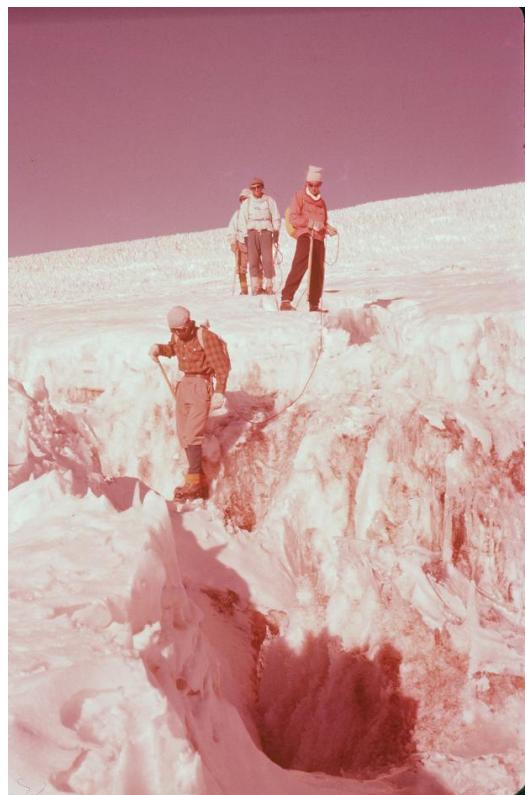
Y-17 サリィリヤス谷をマルモレホ峠に向かう



Y-18 マルモレホ峠にて



Y-19 マルモレホ峠 (4000m) のキャンプ地



Y-20 高所キャンプ (5500m) から
マルモレホ峰 (6100m) に連なる氷雪原



Y-21 マルモレホ頂上から北に連なるアンデスの主稜線/
東はアルゼンチン領の雪氷原

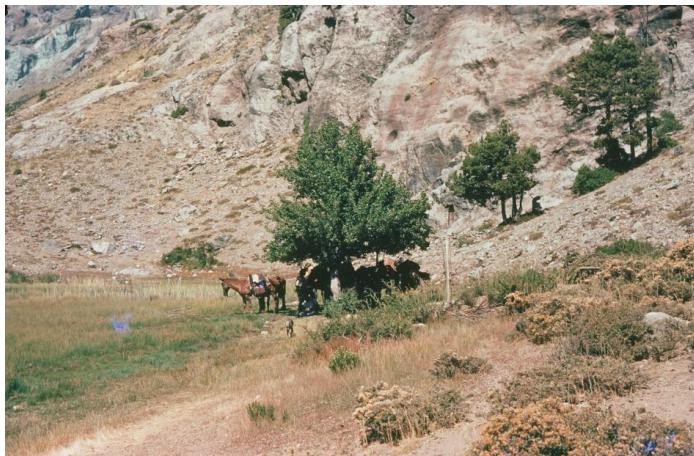
Rio de los Cipreses 源流域 1960.2.27-3.14



R-1 シプレセス川に沿いキャラバンを進める



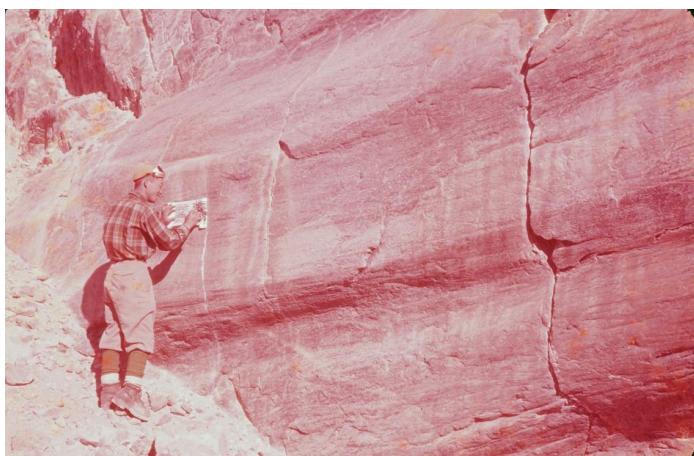
R-2 同上 (馬方 2 人・ラバ 18 頭)



R-3 ビダ鉱泉近辺で野営



R-4 シプレセス川底で氷河の痕跡を調べる太田 L



R-5 同上 太田 L



R-6 前進 BCへの移動中の昼食－丹波他



R-7 シプレセス氷河の頭



R-8 シプレセス氷河上の前進 BC



R-9 シプレセス氷河の南側を見る



R-10 シプレセス氷河の東側（H.クルス博士峰）を見る



R-11 シプレセス氷河のクレバス



R-12 シプレセス氷河を南下する



R-13 シプレセス氷河を北上する



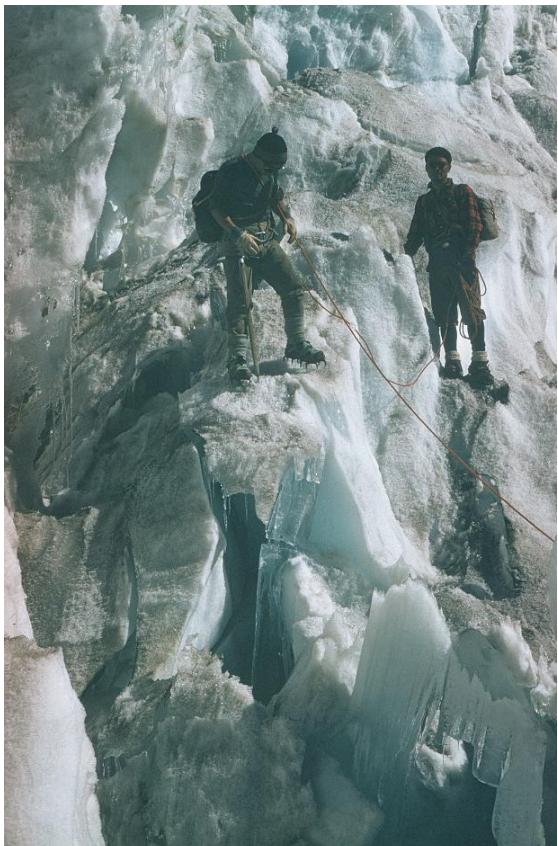
R-14 シプレセス氷河の西陵氷河を登る



R-15 シプレセス氷河の北東を見る



R-16 シプレセス氷河を俯瞰（北東方向）する



R-17 シプレセス氷河の西陵をロサーレスと登る



R-18 同上 西陵氷河を登る



R-19 無名未踏峰（4450m）を日智鋒と命名/豊田一
フェルスター・ロサーレスと共に(1960.3.6)



R-20 シプレセス氷河の東陵



R-21 チリアンデスの主稜に連なる山々
(北東方向を見る)



R-22 シプレセス川流域の flora (名前不詳)



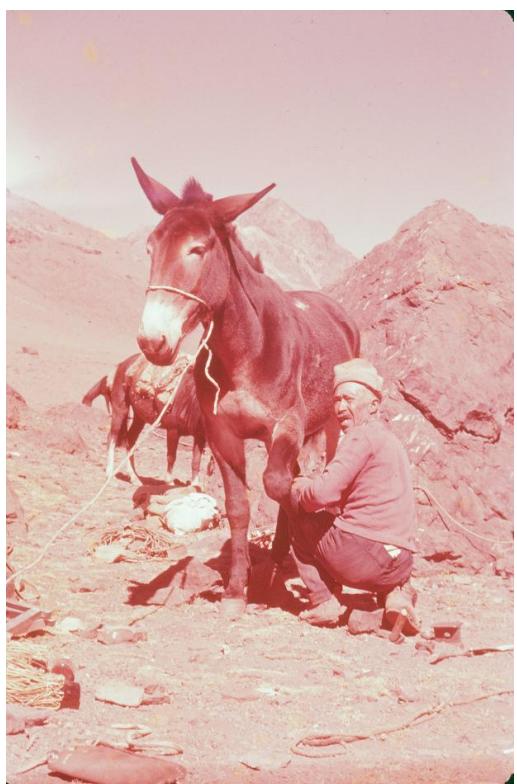
R-23 シプレセス川流域の flora

(田中薰・教養部奥田両教授の依頼で撮影)

Colorado 谷の遡行と源流の山々 1960.3.19—4.4



C-1 コロラド谷のキャラバン



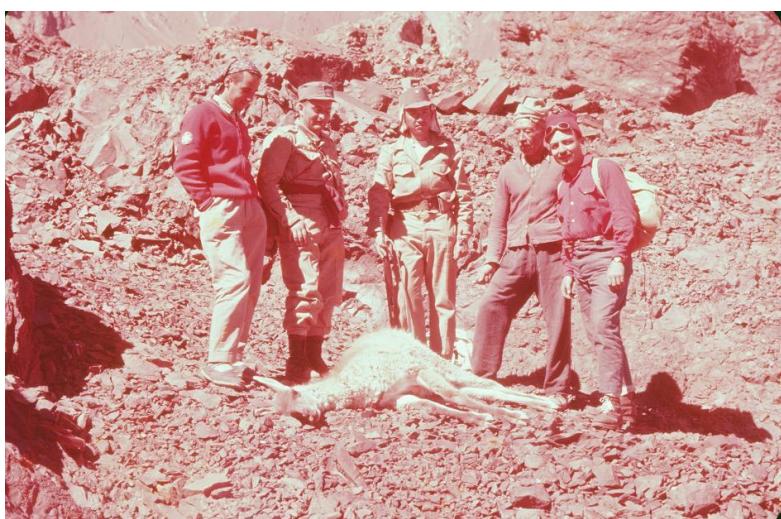
C-2 ラバ 24頭をまとめるのは
馬方マニュエルである



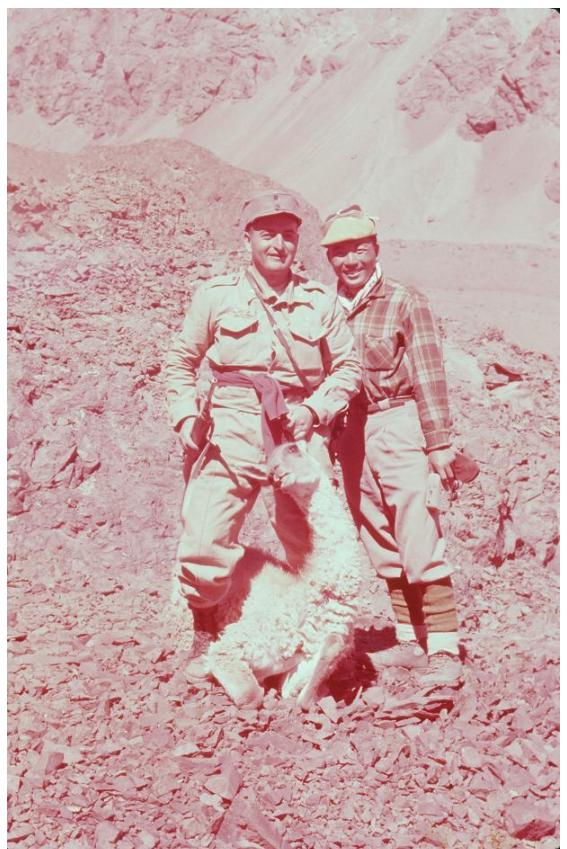
C-3 キャラバンは深い渓谷の断崖の道を行く



C-4 すでに初冬に入った新雪の斜面を登る



C-5 陸軍山岳学校派遣の伍長が射止めたグアナコ



C-6 射止めた獲物に喜ぶ同ボカス中尉と太田 L



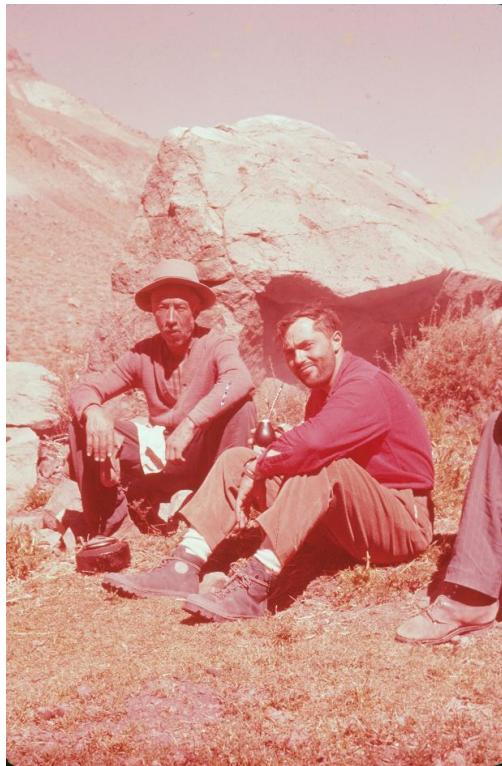
C-7 伍長は鷲1羽も撃ち落とした



C-8 国境の無名峰 (5136m/太田)・(5126m/太田)・
(4518m/丹波) の初登



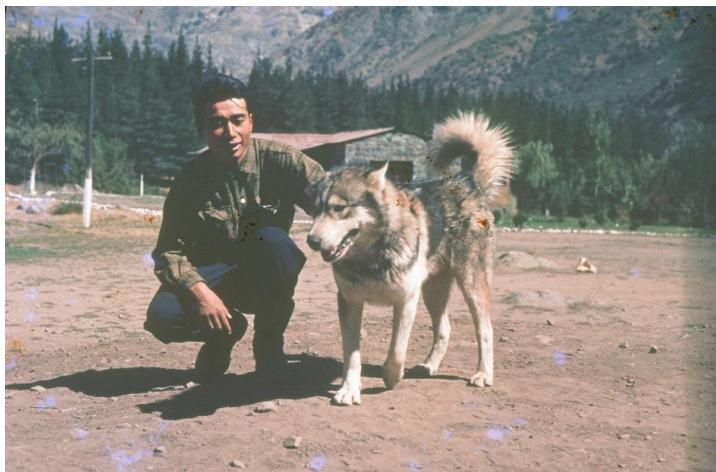
C-9 いずれの登攀でもアルゼンチン領のアコンカグアが迫ってくる



C-10 コロラド谷山行チリ側リーダー・
ミルスと馬方マニュエル



C-11 同山行日チ全メンバー



C-12 M 馬方の愛犬（山行に同行）と丹波



C-13 全員が酒宴に招待された陸軍山岳学校全景



C-14 同校正面玄関

第2次日チ遠征まとめ				
山群	登頂山岳	1960	登頂者	
第1 山行 (Y)	C. Blanco, 5200	3. 13	太・豊	
	Co. Kobe, 5100*	2. 13	豊田	
	Co. Bello, 5200	2. 14	丹波	
	Marmolejo, 6100	2. 20	全員	
第2 山行 (R)	Co. C-Japón, 4450*	3. 6	豊田	
	Co. Cotón, 4550*	3. 11	豊田	
	Co. Cotón N, 4350*	3. 12	太・丹	
第3 山行 (C)	Co. Amarillo, 5136*	3. 25	太田	
	Co. Expedición, 5126*	3. 25	豊田	
	Co. Altar, 4518*	3. 25	丹波	
	Nev. Leiva, 4669	3. 26	丹波	
	Co. Columpios, 4200			
	- N.(北峰)*	3. 28	太・丹	
	- S.(南峰)*	3. 28	Chile	

注: *印の山名は初登(100年誌付表より)

以上

注記：掲載画像は遠征記録として残る 350 枚のスライドから厳選し、写真屋で画面のクリーニングを行ったが、年数が経っていることもあり、一部のピンク色への変色は治らなかった。